

南北戦争・再建期の記憶と アメリカ・ナショナリズム研究

—トマス・ナスト政治諷刺画リスト(1)1859-1870—

貴 堂 嘉 之

はじめに

本稿の目的は、最近の国民国家論に関する研究動向を批判的に整理した上で、アメリカ・ナショナリズム研究の今後の課題を検証し、アメリカ合衆国の南北戦争・再建期の〈表象〉と〈記憶〉をテーマにした新しい研究の可能性を探ることにある。アメリカの国民意識形成において決定的な意味を持つ南北戦争・再建期の国民的記憶のかたちを検証する基礎作業として、本稿ではアメリカを代表する諷刺画家トマス・ナスト(Thomas Nast:1840~1902)の全作品、2188タイトル(本稿では1859年~1870年分)を紹介する。共和党急進派の政策理念を視覚化したナストの作品が、再建期ナショナリズムを民衆に浸透させたその社会的影響力や図像に残された過去の記憶の表象分析は、出版資本主義とナショナリズムの流行との連関性の解明とともに今後、重要なテーマとなることが予想される。日本でも復刻版の刊行が始まった共和党系の週刊誌『ハーバース・ウィークリー』上の作品リストを掲載することで、この分野での表象研究のデータベースとしての利用を可能にし、アメリカ・ナショナリズム研究の裾野を広げることを期待したい。

1 アメリカ合衆国の国民国家論

(1) 表象・記憶・アイデンティティ

国民を「想像の政治共同体」と定義するB.アンダーソンの方法を準拠枠にして、日本の歴史学界はここ数年、国民国家論が一大ブームであった⁽¹⁾。従来の政治史研究では、国家機構や法制度の確立が重視され、国民国家体制そのものが当然あるべき近代化の到達点として議論されてきたのに対して、新しい枠組みでは、「国民的主体」としての我々意識=ナショナル・アイデンティ

ティの形成過程に焦点が移り、政治的概念としての「国民」の再解釈、国民国家の相対化を目指す方向性が打ち出された。国民国家形成の時期はちょうど、エリック・ホブズボウムが指摘する古くて新しい「伝統」が大量生産される1870年～1914年とほぼ重なっている⁽²⁾。「国民的主体」を立ち上げるために動員されたシンボル、儀礼、記念・顕彰行為(commemoration)などが「国民化」のための社会的装置として分析の主たる対象となり、ここに、国民国家論は図像・表象分析や公的記憶(public memory)の問題をも視野に入れた新たな研究段階に入ったと言える⁽³⁾。

「最初の国民国家」として合衆国は、近代日本以上に人工的に国民意識を立ち上げる必要に迫られた。独立革命では、ジョージ三世の騎馬像を破壊して儀礼的な「王殺し」を実践することで脱イギリス人化へ動き出し、共和国初期にあつてはジョージ・ワシントンを統合シンボルにナショナル・アイデンティティの創出を図った。だが、南北戦争以前のアメリカ合衆国は、スコロネックが「制度的に裁判所と政党」のみで構成されていたと指摘するように、連邦政府の制度的基盤が極めて脆弱であつたことから⁽⁴⁾、国民意識の創出は困難に直面する。しかし、南北戦争を契機に、連邦徴兵法等の戦時体制を通じて、連邦権限は飛躍的に拡大する。従来 of 州市民権とは別に、連邦市民権法を軸に、解放黒人を含む「異質な分子を可能な限り」国民化することを企図し、一元的な「アメリカ国民」の創造を目指すことで大きな転機を迎えることになる。この南北戦争・再建期を、アメリカ合衆国の国民国家・国民創造の淵源として位置づける歴史研究は、日本では数少ない⁽⁵⁾。だが、わずか272語からなるゲティスバーグ演説においてリンカーンが「国民(nation)」という単語をそれまでの「連邦(Union)」に代えて五度も意識的に使用したり、この時期から、文法的に「アメリカ合衆国(the United States of America)」という名詞が、複数名詞扱いから単数名詞扱いに変化するなど、単一のアメリカ国民誕生のモメントをこの時期に設定することを裏付ける事実は多い。かくして、国民の母胎となる移民集団を「国民化」Nationalizationする様々な可視装置が、これ以後19世紀後半から20世紀初頭の第一次世界大戦期に至るまで、国民意識創出に大量に動員されていくことになるのである。星条旗や国旗儀礼(Guenter[1990])、独立宣言(Detweiler[1962])、独立記念日

(Travers[1997])、「アメリカ化の日(Americanization Day)」(松本[1999])、20世紀初頭の各種ページェント(Glassberg[1990])、メモレーション(Gillis[1994]; Spillman[1997])など、公的記憶の結節点・表出点として位置づけられる個別テーマの研究が、日米双方で現在百花繚乱の観を呈している⁽⁶⁾。

アメリカ人としてのナショナル・アイデンティティは、クレブクールが「アメリカ人とは何か」という問いは発してから、今日の多文化主義論争に至るまで、アメリカ研究の核心的な問いであり続けている。アイデンティティとは記憶をもとに構築され、逆に、記憶されるものはアイデンティティによって規定されている。国家に帰着しないアイデンティティが、人種、民族、ジェンダー、階級の各位相に別層を形成する多人種・多民族国家である以上、この記憶とアイデンティティの関係や自己表象の問題はより複雑である。ただ、ナショナルな表象や記憶に限定した場合、そこで問題となるのは、多様な記憶を強制的に統合し一元化する、いわば「同意の暴力」とでも呼びうるような権力を行使する国家の役割である。近代歴史学が、「国民的主体」である「われわれ」を他者から区別し、国民の共有すべき過去の記憶=「国民の物語」を選別、維持、管理する機能を積極的に果たしてきたとして、国民国家の成立と展開に共犯関係を持っていたとの指摘が近年なされているが、そのような国家権力とアメリカ史像の関係について検証することは今後の残された課題の一つであろう⁽⁷⁾。1960年代以降に「底辺からの歴史学」を標榜する社会史研究が登場することでアメリカの歴史学界が大きく変貌を遂げる以前の段階、少なくともコンセンサス学派による一枚岩的なアメリカ国民を主語にした「アメリカ例外主義(American Exceptionalism)」的な歴史叙述には、冷戦期のアメリカ合衆国にとって「役に立つ過去useful past」を選別して「国民の物語」を構築しようとした意図を容易に見取することができる。

こうして国民国家研究は、従来の同化論モデルで展開されてきた「アメリカ化」Americanizationとは異なる位相で「国民化」の過程を検証することで大きな成果を挙げようとしている。社会学的なアプローチを用いて、国民統合を「同化」の問題として扱い、ホスト社会の規範とされるWASP的文化への順応の度合いに還元して検討してきた移民研究の立場とは、全く異質なものである⁽⁸⁾。本稿で提唱する19世紀後半期のアメリカ・ナショナリズム

ム研究もまさにこの延長線上にある。だが、ここではまず先を急がず、先行研究に反省を加え今後の展望を探ることにしたい。というのも、近年の国民国家論は、少なくとも以下の二点において克服すべき重大な方法論的課題を抱えていると考えるからである。

まず第一に、先行研究によって国民国家の相対化は果たして進んだのかという点である。アンダーソンが『想像の共同体』で展開した議論に、国家がフィクションであるとの記述はない。だが、先行研究の多くが、「作られるアメリカ」という「擬制」国家パラダイムに基づいて、「国民」の創出過程を現状肯定的に描く傾向にある⁽⁹⁾。創造過程を解明してもナショナリズムの存立基盤である権力構造への分析を欠いている以上、それは脱政治化したオプティミズムに陥らざるを得ない。むしろ当初の目的とは正反対に、そこでは再び実定的で固定的なナショナル・アイデンティティを獲得したアメリカ国民が浮かび上がるだけであり、健全なナショナリズムを是とする安易な着地点が想定されているのではないか⁽¹⁰⁾。

J.ボドナーの研究が示すように、「国民化」の回路は決して上からの押しつけを前提にした民衆への「名付け」行為にのみ力点を置くものではない。むしろその「名付け」行為に民衆が自発的に「名乗り」を挙げる呼応関係、そのような公式文化(official culture)と個別民衆文化(vernacular culture)の両者が交差し、闘ぎ合う場に、公的記憶(public memory)の誕生を見据え、愛国主義、ナショナリズムの言説が現在との対話の中で再生産され続けると指摘している。ここで、「名乗り」行為という民衆側の自発性・内発性を重視したのは、60年代以降の社会史研究における「下からの眼差し」との結合を想定し、さらには権力秩序の分析をも射程に収めた社会史研究の政治史への復権を目指す試みをも継承することが期待されたからである。

だが、このアメリカ社会史研究と国民国家論との統合が容易に達成されると想定したところに、今日の脱政治化した国民国家論のプロットが準備されていたのではないだろうか。60年代以降の社会史研究は、支配的な過去の認識として君臨してきたコンセンサス史学の描く「国民の物語」の陰に封印されていた、少数民族や黒人や女性などマージナルな「物言わぬ」人々の記憶に光を当てて、彼等の自律的な文化の諸相を掘り起こすことで多元的なアメ

リカ社会像の再構築に乗り出した。だが、現時点で確認されるべきは、社会史研究が潰したはずのアメリカ史のマスター・ナラティブが未だ解体されずしぶとく生き残り、社会史研究がこの物語構築に間接的に関与しているという点である。

アメリカ合衆国の過去のビジョンを相対化するためには、依然支配的な影響力を及ぼしている二つの「国民の物語」を慎重に解体する作業が必要だったはずである。一つは、「移民の国アメリカ」という物語であり、いま一つは「理念の共和国アメリカ」という物語である。牧原憲夫は、近代日本の国民化を検証する作業において、民衆が「上から」国民として「名付け」られる行為に対して、必ずしも積極的に「名乗り」を挙げることはなく、むしろ権力装置から「逃げる主体」として「客分意識」を持っていたと指摘している⁽¹¹⁾。しかし、アメリカの場合、強制連行された黒人奴隷などのケースを除けば、国民化の対象となる移民集団は、自由意志に基づいて渡航してくるのであり、そこでは「国民になること」が当然の目標として設定されている。外国人を国民に転化する「帰化(Naturalization)」という術語が文字通り示しているように、「アメリカ人であること」が自然(natural)な状態なのである。それ故、社会史研究では自ずと、帰化法・移民法の人種差別的な規定や国民統合の過程でマイノリティ集団が「排除される」局面(exclusiveness)に焦点が絞られ、「包摂される」過程(inclusivemess)、つまり「アメリカ人になること」の政治的意味が問われることはない。だが別の言い方をすれば、アメリカの社会史研究の牽引車の役目を果たしてきた黒人研究、先住民研究、アジア系アメリカ人研究はみな、国家による差別を激しく告発し、アメリカ政府に対して被抑圧者としての自己承認を求めてきたが、実は彼等マイノリティ集団が国民統合や平等を希求する社会運動体としての性格を持つがゆえに、研究そのものはナショナリズムを強く帯びているのである。移民達が、勤勉に働くことで立身出世していくホレーショー・アルジャー流の成功物語のナラティブと、人種や階級の境界を超えて支持され得る自由主義と民主主義の伝統が息づく理念の共和国アメリカという予定調和的なナラティブは、そこでは突き崩され得ない。それどころか、むしろマイノリティ集団までもが国家による自己承認を要請することで、ネーションの構成員の幅を広げる結果と

なり、社会史研究はナショナリズム構築に加担してきたと言わざるを得ない。抵抗主体として想定される黒人、アジア系、女性といった行為主体が国家体制の内部での運動体である限り、すべてはナショナルな次元に還元されてしまうのである。

国家による犠牲者、被害者としての立場を強調する被抑圧者史観に基づくアメリカ社会史研究の限界は、いまや明らかであり、議論は振出に戻らざるを得ない。我々はこちらでアンダーソンのナショナリズム論が、民衆の主体性や自発性に関して主題化したものが、「我々」の想像力の持つ途方もない暴力性であったことを想起すべきである。また同時に、この問題意識は、フーコーが『監獄の誕生』で展開した近代権力論とも重なっていることに注意を喚起したい。近代国家は必ずしも抑圧装置として権力を行使した点に特徴があるのではなく、我々の欲望を刺激し解放をささやき続けることで、国家に我々を自発的、内発的に取り込み、いわば自ら権力を生み出す主体として国民を誕生させ、同時に国家に従属していったというパラダイムである。つまり、近代権力が<排除><抑圧><隠蔽>といった外部からの抑圧的な「鉄の鎖 chains of iron」としてではなく、「諸観念の鎖 chains of ideas」として内部から作用する点に特徴があるのだとすれば、アメリカ社会史が告発する「排除・差別(exclusiveness)」の位相ではなく、国家に我々が自発的に取り込まれていく「包摂(inclusiveness)」のメカニズムにこそ近代権力を解明する鍵があるのではないか⁽¹²⁾。

私たちの生活世界が国民国家なしには成立し得ないことは現時点で明らかである。ポスト国民国家論やカルチュラル・スタディーズの立場からは、国民国家の全面解体を企てる議論も提出されている。移民研究において、トランス・ナショナルやディアスポリック・アイデンティティを強調する研究もまた然りである。だが、ことはそれ程単純ではないはずである。アメリカの場合、国家は自由・平等といった近代的価値の擁護装置として一定の役割を果たしてきたし、秩序維持に権力の存在は不可避である。今問われているのはそのような前提の上で、<アメリカ人であること>や<アメリカ人になること>の意味を問い続け、止揚していくことであろう。

この文脈で、アメリカ社会史研究のパラダイムを組立て直すならば、被害

者でありながらも、マイノリティ集団自身が、国民国家の構成員として「微細な権力」を宿した権力の一部として機能してきたことを前提に、彼等自らの主体責任を考察するような視座の転換を行うことでしか、ナショナリズム研究を深化させることはできない。また同時に、フランス社会史研究の立場からの二宮宏之の発言を援用すれば、アメリカ社会史研究にも、「国民国家に回収されないソシアビリティ」を探究する方向性があってもよいはずである。アンダーソンは、いかに搾取的な体制があろうとも、国民は「水平的な同志愛」として想像されると述べている。このことは、実質的な差異が作られても、それが差別と認知されない構造が国民国家の編成原理に組み込まれていることを示している。G.L.モッセは、近代秩序がナショナリティとリスベクタビリティの共振によって成立していると指摘した。自国民と外国人、国民と非国民、WASPと非WASP、男と女、異性愛と同性愛のような差異を創出し、国民のあるべき基準を作り出すことによって近代の秩序は成り立っている⁽¹³⁾。基準から逸脱しているとレッテルを張られた集団は、被差別の自己を恥辱的に感じ、その基準をクリアするべく自発性、内発性が引き出される。その結果として、均質な国民が大量生産されていくメカニズムである。我々の研究は、もはやこの差別を暴き告発する次元に留まるのではなく、「排除」と「包摂」の弁証法的展開を促し、均質な愛国市民を大量生産する巧妙なナショナリズムのメカニズムの解明にこそ、焦点を絞るべきだろう。

さて、もう一つの論点は方法論に関する問いとして、なぜ表象と記憶の次元で過去と対峙してナショナリズム研究を再出発させる必要があるのかという点である。この点に関して、私たちはまず以下の二点を確認するところから始めなければならない。第一に、過去に関する公共の記憶を、歴史家が「文字」テキストの形態で維持、管理し、独占できると信じられる時代が終わったこと。第二に、歴史家が歴史を語る特権的地位を保証してきた「客観性 objectivity」なるものの限界が明らかになり、歴史学そのものが過去を認識する数多ある営みの一つとして位置づけられるようになったこと。この点に関して、ヨーロッパではアナール学派の表象論が、アメリカではポスト構造主義や言語論的転回の影響を受けて、Peter Novickの *That Noble Dream: The "Objectivity Question" and the American Historical Profession*

(Cambridge, 1988) が、「客観性問題」を争点に、「歴史の真実」とは何かという歴史研究の本質をめぐる論争を引き起こした。過去が現在から切り離されて自立的に存在するのではなく、現在から再構成され、問題化された「構築物」に過ぎないという主張が、歴史家の発話の場の在り方に主体的反省を促している。要するに、ある過去の出来事を選別して呼び起こす行為すべてを、表象(representation)行為として広義に定義し直し、文字と非文字テキストの境界を取り払い、記憶と歴史の境界を取り払った上でなければ、「想像の共同体」を成立させている国民的記憶のかたちを検証することなど不可能なのである。

過去はもはや政治化する以前の形では復元できないことを前提に議論を始めなければならない。過去を記述する行為には、いかなる場合にも、記憶すべき出来事と忘却すべき出来事を恣意的に選択するプロセスが存在する以上、その行為には制作性や政治性がつきまとうはずである。過去を記憶に留めるかたちは多様であり、その記憶媒体は、文字テキストに限定されない。だが、絵画・彫刻などの非文字テキストと比較して、文字テキストには圧倒的に特権的な地位が与えられてきた。それは言語が人間の他の象徴機能すべての上に君臨する特権を認められてきたことと関連しており、それが文字テキストにのみ「客観性」の装いを付与してきたからである。

歴史家の多くは、文書館に保存されている一次史料から紡ぎだされる歴史叙述は「意識的・分析的・客観的」であるのに対して、その他の非文字テキストによる過去の記憶(口承、画像イメージなど)には「本能的・自然的・主観的」といった印象をもち、そこに貴賤関係をみるだろう。アメリカの歴史博物館やエスニック博物館が近年、収集、保存、展示といった従来の活動に加えて、特定の人々の集合的記憶を意図的に作り出す展示を通じて、きわめて政治的意味合いを持つようになってきていることは知られている。アメリカでは、多文化主義思想の浸透の結果、PC(Political Correctness政治的妥当性)を有力な基準として大幅な過去の読み替えが進行したが、「国民の物語」の根幹をなす戦争をめぐる展示では、日本と同様にPC(Patriotic Correctness愛国主義的価値)による判断が強まる傾向にある⁽¹⁴⁾。このような博物館の歴史展示の政治性や制作性は見抜けても、果たしてどれだけのアメリカ史研究者

が、膨大な歴史一次史料を保存しカタログ化してきた国立公文書館(National Archives)を、ピエール・ノラの指摘するような、記憶を博物館化した場所として捉えることができるだろうか。すでに公文書として保存される過程にどれだけの政治的選別行為がなされたのか。その意味で、文書館が記憶の保存所というより、記憶の製造所であったということ⁽¹⁵⁾。

国立公文書館の史料であれ、正史として記述されたものであれ、これは公共の記憶の座を巡る政治的闘争の結果勝ち残ったものである、我々はその過程で抑圧され、忘却の対象となった様々な記憶を見出し、国民的記憶との関係を議論する必要がある。「同意の暴力」が行使されるプロセスでは、国家の記憶すべき過去を記念・顕彰するコメモレーション研究とは対極に位置する、「沈黙や忘却の創造」に関わる研究を立ち上げる必要があるだろう。そこに本稿が注目する出版メディアの視覚的表象史料の社会的影響力を検証するアプローチを模索する積極的意義があるのである。アメリカでは、過去や記憶に関する研究がこの10年で急速に進んだ。だが、記憶と忘却のメカニズム、トラウマ的記憶のされ方の問題点など、いまだ解明されず残された課題も多い⁽¹⁶⁾。だが、このような方法論的課題を克服しながら、記憶と表象という次元をスタートラインに、国民国家論を再出発させることで研究を深化させることが可能になるのである。

(2) 南北戦争・再建期の記憶と歴史

先行研究が示すように、南北戦争・再建期を国民国家論の起点とすることに疑義を挟む余地はない。だが、南北戦争期は、制度論的な観点から考察した場合の出発点であり、むしろ先述の個別研究では、アメリカの国民意識の成熟は、世紀転換期から第一次世界大戦にかけての時期に特定される。本稿が注目するのは、この南北戦争から第一次世界大戦までのタイムラグ、約50年間における「国民」意識の形成・変容過程である。

この国民意識の核には、国家分裂の危機を回避した南北戦争とその後の再建政治という共通のトラウマの記憶があるわけだが、この戦争の記憶の変遷に、19世紀転換期に出現するナショナリズムを読み解く鍵が隠されている。この時期に立ち上がった〈アメリカ人〉という想像の政治共同体のナショナ

リズムが、20世紀を「アメリカの世紀」とする上でいかなる役割を果たしたのか。アメリカ人という「我々」の想像力に基づく暴力が、どれだけの対外戦争を惹起したのか。米西戦争を契機とする帝國的再編時にこの国民意識は、いかなる役割を果たしたのか。〈アメリカ人であること〉の政治的意味を問うとき、その問題解明の鍵は19世紀末の成立期に凝縮されている。

E.フォナーは、アメリカ史の通史において南北戦争・再建期の時期ほど、歪んだ歴史解釈がなされてきた分野はないと指摘している⁽¹⁷⁾。「未完の革命」としての新解釈が提出され、国民国家形成の淵源として再建期の全面的な見直しが始まったのは、第二の再建と呼ばれる公民権運動が起きる1960年代以降のことである。それまでは、奴隷解放宣言によって解放された「無能な黒人達」への参政権付与を政治的失策と評価し、私利私欲に奔る政治家の汚職の蔓延した政治的・社会的混乱期という一面的解釈が今世紀初頭から一貫してなされてきた。

南北戦争(Civil War)は、南北合計62万3千人の戦死者を出した五年の長きに渡るアメリカ史上最大の内戦であった。戦争目的が当初の連邦救済から、奴隷解放宣言により社会革命を目指したものと変質したこと。戦時動員体制を通じて連邦権限が拡大し、連邦市民権概念を核にして「国民」統合が図られたこと。戦後の再建期には、共和党急進派の主導下で、解放黒人を新しい「想像の政治共同体」へと組み込む国民化の動きが進行したこと。1960年代以降の政治史や社会史研究が解明した以上のような論点を鑑みれば、今世紀初頭に成立した歴史解釈がいかに歪んだものであったかがわかる。これが黒人に対する根深い人種差別に起因するものであることは明らかである。だが、それ以上にここで重要なのは、「国民」の在り方や境界をめぐる様々な政治闘争がその背景にはあり、旧解釈が公共の記憶の座を獲得する過程で、「同意の暴力」が行使され、記憶と忘却の恣意的選択が実行されたという点であり、この旧解釈における「国民」意識が、米西戦争後のアメリカの帝國的拡大のイデオロギーの基盤となっているということである。

エルネスト・ルナンは、集団としての「国民」の形成の起源には「内戦」(Civil War)の記憶の忘却があると指摘している。確かに、単一の国民国家構築をめぐる闘争の場は、戦後直後に戦場から政治・文化的位相へと移り、戦

後の言説空間では、勝者の北部・共和党系メディアが新たな「国民」のシンボル・儀礼の創造を開始する。次節で取り上げる『ハーパーズ・ウィークリー』はその代表格であり、国家表象である自由の女神ミス・コロンビアを描いた諷刺画やリンカーン、グラントの英雄化においてトマス・ナストほど功績のあった画家はいない。戦時中に連邦軍の英霊の記憶と結びつき神聖化され権威づけられていった星条旗を中心に、共和党側はいわゆる「血染めのシャツ」を振る戦略をとり、愛国主義的文化を解放黒人とともに構築しようと試みた。他方、南部の旧エリート層は政治権力を剥奪され、南軍兵士の名誉は回復されず、南部人は戦争の敗北を「失われた大義Lost Cause」という言葉が象徴的に示すようにロマンチックな悲劇として記憶するようになる。

このような南部と北部においてそれぞれに異なる記憶の共同体が存在する段階で、＜アメリカ人＞という「国民」の誕生を迎えることは難しい。そこには、ルナンが指摘するように、「国民」成立に向けて内戦の記憶のある部分を集的に忘却し、南北「和解」のためのミドル・グラウンドを創造することが必要だったのである。本稿が目指すのは、この南北和解のプロセスが当然伴ったであろう、「同意の暴力」が実行された矛盾に満ちた記憶の表象をめぐる闘争の過程であり、これにより国民の境界はどのように変容していったのかという点である⁽¹⁸⁾。この戦争の何が封印され、忘却の対象となったのか。何が記憶の核として残ったのか。この両者を解明することで、アメリカ・ナショナリズムの構成要素を分析することが可能になるであろう。

このような視座に立って研究を拓けることで、初めて「国民」の境界に関する歴史研究を深化させることが可能になるだろう。近年、労働史研究において盛んに議論される白人性(Whiteness)の問題は、決してアイルランド系やユダヤ系の移民労働者の社会的上昇を果たすために使用されたセルフ・アイデンティティの問題としてだけ議論されるべきテーマではない。むしろ広義に、この19世紀後半期の北部、南部の両地域で展開した一様ではない国民意識の創出過程と密接にリンクしていた点を忘れるべきではない。1790年の帰化法の帰化申請条件に「自由白人free white」規定がされて以来、アメリカ合衆国の国民概念は常に白人概念の境界と連関している。解放黒人の国民化、アイルランド系移民のようなエスニック集団の脱黒人化＝白人化による国民

化戦略の過程と共に、中国系移民の脱白人化＝「帰化不能外国人」化のような、多様な人種化と国民化の重層構造の分析こそが、今後重要なテーマになるものと思われる⁽¹⁹⁾。さらに、この人種階層秩序を内包するナショナリズムは、容易に大国的ナショナリズムとして「帝国意識」へと転化していくわけで、このような手順を踏むことで、ようやく国内問題と対外問題を結びつけて議論することが可能になるはずである。

2 『ハーパーズ・ウィークリー』誌とトマス・ナスト

ここで扱う再建期の表象研究は、未だ研究分野として確立されていない⁽²⁰⁾。だが、ナショナリズム研究が、出版資本主義との関連で検証作業が進められる場合、この時期の絵入り新聞(Illustrated Newspapers)の刊行による複製技術時代の到来は重要な研究テーマとなるであろう。アメリカでは着実に、この時期の視覚的表象を史料データベース化する試みが進行している。なかでも、インターネット上で公開されている、『ハーパーズ・ウィークリー』Harper's Weeklyの図像史料をデータベース化したサイト (<http://www.harperweek.com>) は特筆するに値する。19世紀史の文献のデジタル化が図像史料の分野でも進みつつあるわけである。ここでは再建期の図像史料が時代別、テーマ別(例えば「ジョンソン大統領の弾劾裁判」、「エスニック・アメリカ」等)に体系化されて収集されている。本稿で紹介するトマス・ナスト関連の図像も多数収められている。本研究が『ハーパーズ・ウィークリー』誌に注目するのは、本雑誌が共和党急進派の再建期の政策を映し出す鏡の役割を果たしており、また、再建期における南北戦争の多様な記憶を留める数少ない視覚的表象史料としての価値を有しているからである。再建政治の終わる1877年以後、徐々に封印されていく記憶の形を検証する作業が、『ハーパーズ』誌のナストの諷刺画を通じて可能となるからである。

日本では、アメリカの諷刺画に関する研究は始まったばかりであり、ナスト研究もまた然りである⁽²¹⁾。ここでは、まずA. ペインの自伝をもとに作成したナストの年譜(1840～1902)と⁽²²⁾、『ハーパーズ・ウィークリー』誌に収録された全諷刺画リスト(本稿では1859年～1870年分)を掲載し、19世紀後半期の表象データを体系化する作業を行う。作品の残りのリストとこの図像

史料を使った具体的な分析作業は、稿を改めて行うことにしたい。

1) トマス・ナスト年譜

1840-9月27日Thomas Nast生まれる。生地はドイツのランドー(Landau)。

1846-今夏、ナストは母とアメリカのニューヨーク市へ移住する。

1850-父,Joseph Nastもバイエルン軍を退役し、アメリカの家族と合流。

1853-ナストはGleason's Pictorialのコッシュートを模写して、教師に誉められる。

1853~1857-この間Theodore Kaufmann (ドイツの歴史画家) や、Alfred Fredericks (イラストレーター) に師事し、修行を始める。フレデリクスの勧めで、National Academy of Designに入学。

1858~1859-Thomas Cummingsのもとで修行。Bryan Gallery of Christian Artなどのギャラリーで、名画を模写して勉強。

1856-9月に最初の絵を*Frank Leslie's Illustrated Weekly* (以後*Leslie's*) に発表。父、死去。ナストは、正社員に昇格し、Sol Eytingeのもとで勉強。

1859-3/19に*Harper's Weekly* (以後*HW*) に最初の絵が掲載される。フレデリクスの推薦。11月には、Sol Eytinge とともに*New York Illustrated News*で働く。

1860-著名な伝記作家James Partonの従姉妹であるSarah Edwardsと二月に婚約。ボクシング世界選手権Heenan対Sayersの取材のため、2/15に米国を発ち英国へ。6月にはロンドンを発ち、ガリバルディの赤シャツ隊に参加するためシシリーへ。この間の絵が、*NY Illustrated News*, *Illustrated London News*, *Le Monde Illustré*に掲載される。10月、ナポリでガリバルディと同行。11月、ナポリを発ち、ローマ、フロレンス、ミラノ、ジェノアへ。帰路、生まれ故郷ランドーを訪れる。

1861-1/19,ロンドンを発ちNYへ。2/1,NY到着。*NY Illustrated News*で仕事再開。ニューヨークとフィラデルフィアで、リンカーンのレセプション(2/19)と、ワシントンでの就任式(3/4)を取材(*NY Illustrated*

- News向け)。HWはWinslow Homerを派遣。Sarah Edwardsと9月に結婚。
- 1862-春にLeslie's復帰。夏からHWの美術スタッフとして仕事開始(社長Charles Parsons)。長女Julia (7/1)が誕生。
- 1863-初期の代表作『クリスマス・イブ』と『キャンプを訪れたサンタクロース』をHWに掲載。
- 1864-リンカーンの大統領再選キャンペーンに一役買う。9/3掲載の『南部との妥協』『シカゴ綱領』は国民を刺激。
- 1865-長男、Thomas, Jrが4/28に生まれる。
- 1866~68-ジョンソン大統領やサムナー議員ら共和党議員を揶揄する諷刺画を巡り、HWの編集者William Curtisと衝突。
- 1867-『ニューヨーク市政府』(2/9)によって、ナストの公職任用改革にむけた戦いが始まる。マグローリン社の子供向け本の挿し絵を描く(1869年末から1870年にかけて: David R.Lockeの*Swingin Round the Circle*, Mary Mapes Dodgeの*Hans Brinker*や、Charles Dickensの*Christmas Story of Goblins*)。年末12月から翌年2月にかけて、ニューヨークでGrand Caricaturamaという展示会を開催、その後3月から4月までボストンでも開催。11/2のHarper's Bazarに諷刺画。
- 1868-1月、Charles Dickensの出版記念会に出席。大統領選挙(共和党Grantと民主党Seymour)で、ナストはグラントを全面支援。ダニエル・デフォーの『ロビンソー・クルーソー』、Oliver Opticの*Our Standard Bearer*, *The Life of General Ulysses S. Grant*, David Ross Lockeの*Ekkoes from Kentucky*に挿し絵を描く。次女のSarah Edith (7/2)誕生。
- 1869-NYのユニオン・リーグ・クラブからナストに感謝状。ナストのツイードリング撲滅キャンペーンと反カトリック・キャンペーン開始。
- 1871-妻と子供達は、ツイード・リング側からの攻撃を避けるため、NJのモリスタウンに移住。HWに傑作The Tammany Tiger Loose (11/11)が掲載。11月、ニューヨーク市政選挙でツイードリング敗北。12月、ボス・ツイード、起訴。ナストは、Henry Pullenの*Miss*

*Columbia's Public School*と*The Fight at Dame Europe's School*に挿し絵を描く。四人目の子、Mabel (12/5) が生まれる。

1871～1875 - *Nast's Illustrated Almanac*がハーパー社から創刊。

1872 - 大統領選挙 (共和党Grant vs. 民主党Greeley) 戦で、グラント再選へ精力的なキャンペーン。メディアは*HW*のナスト vs. *Leslie's*のMorgan に注目。グラントは再選を果たすが、ナストは過労から利き腕の具合が悪くなる。

1873 - ナストは、*HW*と異例の終身専属契約を結び、固定給プラス諷刺画一枚ごとに歩合給の契約。3月から6月までヨーロッパ訪問。*Dickens*の*Pickwick Papers* (ハーパー社) の挿し絵を描く。11月から翌年5月まで講演旅行。この年、クレディ・モビリエ事件が起きる。経済面では、「1873年のパニック」が起き、73年から78年まで不況が続く。

1876 - 大統領選挙の年 (共和党のHayes vs. 民主党のTilden)。共和党候補のためキャンペーン。Mark Valeの*Humpty Dumpty*のイラストを手がける。

1877 - 再建政治の終焉。連邦軍が南部より撤退。大規模な鉄道ストを鎮圧するために連邦軍投入。ナストのパトロンであり支援者であったフレチャー・ハーパーの死(5/29)。ナストの*The Millenium* ('The Tiger and the Lamb Lie Together')(11/3)が共和党により激賞されるがCurtisに反対される。3月、*Puck*に最初の記事。

1878 - 家族とともにヨーロッパ旅行。(7-9月) Ludlow Street Jailでツイード獄死。(4/12)

1879 - 陸海軍の将校がナストに感謝状。(2/15)ナストはブレインの中国人排斥政策を批判。(3/8)*HW*の編集部は、民主・共和両党の政治マシンを批判する。五人目の子ども、Cyril生まれる(8/28)。

1880 - 大統領選挙の年 (共和党のGarfield vs. 民主党のHancock)。ナストは共和党の党綱領を支持するが、Garfield本人に関して言及は避けた。ナストの諷刺画がそれまでの木版に代わって、photo-chemical engravingへ。全体に線が細くなり、線より色彩を強調するスタイルへ変化。共和党内の派閥抗争が激化 (Concling のStalwarts vs.

- Blaine率いるHalf-Breeds間)。結局、Garfieldの支持により、1881年にBlaine側が優勢にたつ。
- 1881-Garfield大統領が自称Stalwartのギトーにより暗殺される。(7/2)
- 1882-「スタールート」郵政スキャンダル発覚。6月には、イタリアのガリバルディ死去。
- 1883-英国訪問(5月)。10月にはカナダ訪問。しかし、肺炎にかかり、フロリダで治療。
- 1884-2月に仕事復帰。復帰後最初の諷刺画が3/1号に掲載される。大統領選挙キャンペーン(共和党Blaine vs. 民主党Cleveland)で、ナストは共和党候補のBlaine支持に反対。HWの同僚を説得し、民主党Cleveland支持へ。選挙期間中、HWとPuckが民主党支持、Judge他が共和党支持。
- 1885-Grant元大統領死去。(7/23)
- 1886-HWを辞職。固定給は一年継続。ナストは、自分のクリスマス絵本とツイードリング批判本の出版に向け準備(1890年にクリスマス本だけ出版。)ヘイマーケット事件がシカゴで起きる(5/1)。元アーサー大統領死去(11/18)。
- 1887-講演旅行で全米各地を回る。(コロラド州デンバーから、オレゴン州ポートランドまで)
- 1888-大統領選挙キャンペーン(共和党Harrison vs. 民主党Cleveland)で、ナストはClevelandを支持。New York Daily Graphicで仕事。資金は民主党全国委員会から受けた。この選挙で初めて、支持した候補が敗北。The Complete Works of Josh BliingsとThe President's Message by G. Clevelandのイラストを担当。息子のいる英国に旅行(11~12月)。88年から91年にかけて、シカゴで出版されているAmericaに絵を描く。
- 1889-Timeに絵を描く。ハーパー誌は経営難に陥る。Rufus ShapleyのSolid for Mulhoolyの挿し絵担当。
- 1890-1891-ニューヨークのIllustrated Americanに絵を描く。経済的に行き詰まり、モリスタウンの邸宅を抵当に入れる。HWで、Nast's

*Christmas Drawings for the Human Race*を出版。ナストは、*Once a Week* (のちに*Collier's Weekly*) に時々イラストを載せる。また、*Chicago Inter-Ocean*に絵を載せたり、Edgar Fawcettの*A New York Family*にイラストを描く。

1892—*New York Gazette*で働く。ナストは債権者となりモリスタウンの邸宅を再び抵当に入れる。大統領選挙 (共和党Harrison vs. 民主党Cleveland) 戦で、共和党から資金を得てハリソン再選のためキャンペーン。しかし、敗北 (落選候補支持は二度目)。夏に、*Gazette*誌の名前を*Nast's Weekly*に変更するが、翌年には廃刊。

1893—*New York Recorder*で働く。

1894—ヨーロッパ訪問。イラストを描くように要請がある。

1894—1895—絵画Peace In Union (イリノイ州ガリーナ:グラント縁の地)

1895—絵画Saving the Flag / St.Nicholas (St.Nicholas Club, New York)

この年6月から翌年2月まで*HW*で仕事復帰。

1895—1896—絵画: The Immortal Light of Genius

1896—*The Insurance Observer*で1902年まで働く。ハーパー社はJ.P.Morganから資金調達。

1898—*New York Evening Post*で、1901年まで働く。米西戦争勃発。

1900—共和党マッキンリー大統領、副大統領にセオドア・ローズベルト。

1901—絵画: Santa Claus (Oyster Bay, New York セオドア・ローズベルトのため)。ナストのサンタクロース関係のイラストが*Leslie's*に掲載される。マッキンリー暗殺により、ローズベルト大統領へ。

1902—ローズベルトにより三月、エクアドルの領事に任命される。ナストは、その年の12月1日黄熱病にかかり、12月7日死去。*HW*は、ナスト死去の三年前に倒産。モーガンに引き継がれ、1916年まで存続。

2) ナストの風刺画の分類と年別リスト

<ナスト作品年代別リスト>は、*HW*誌が発刊された1857年から1899年までの43年間、総頁数にして42,880頁のなかから、ナスト作品のみをリストアップした作品総目録である。これまでナストの作品目録として唯一

参照可能であったのは、未亡人Sarah Nastが作成したThomas Nast: Drawings published in Harper's Weekly, 1859-1886. (以後、SNリストと表記する)であった。タイプ打ちされたこの91頁の未刊行目録はニューヨーク公立図書館に所蔵されており、1859～1886年の期間の2120タイトルが記載されている。また、SNリストには、後日ニューヨーク公立図書館のアーキビストが手書きで8タイトル追加しているのので、本資料から割り出される作品総数は2128タイトルとなる。

これをもとに、HW誌の全ページを再調査し、作成したものが以下の<ナスト作品年代別リスト>である。本調査の結果出てきた総数は、2188タイトルであり新たに60タイトルが追加されたことになる。その内訳は、サラ・ナストの調査した1859～1886年の期間において、彼女が見落としていた作品で新たに発見されたものが31タイトル、それに調査対象外であった1886年以降の作品が30タイトル見つかったこと、それから彼女がリスト・アップした作品のなかで『パンチ』からの転載でナスト作品としては認められない作品一点を削除した結果である。タイトルのカウント方法は、一頁内に複数の風刺画が掲載されていても、題目が一つの場合は1タイトルとして数え、題目が別個につけられている場合は、別々の作品としてカウントした。ただし、1866年度のInside-A Chronicle of Secessionに添えられたイラストに関しては、毎週ごとに全体を一作品として数えた。

<ナスト作品年代別リスト>の表記方法は、<年別の連番-掲載日-タイトル-風刺画の種別-掲載頁>の順序で記載されている。風刺画の種別としては、四種類のカテゴリーを設定した。表紙掲載作品はFront Pageの<F>、見開き二頁作品はDouble Pageの<D>、一頁の作品はOne Pageの<O>、それ以下のサイズは、それぞれ<1/2><1/3>と表記し、コミック漫画サイズの作品をComicの<C>として記載した。

<ナスト作品年代別リスト>

年	総頁数	ナスト諷刺画の数	内 訳				年	総頁数	諷刺画の数	内 訳			
			<F>	<D>	<O>	<C>				<F>	<D>	<O>	<C>
1859	844頁	1	0	0	1	0	1878	1060頁	132	35	10	35	52
1860	832頁	0	0	0	0	0	1879	1012頁	140	37	5	39	58
1861	832頁	0	0	0	0	0	1880	836頁	121	33	4	30	54
1862	832頁	10	2	4	3	0	1881	904頁	114	31	5	15	62
1863	832頁	31	2	13	15	1	1882	844頁	142	13	1	35	93
1864	848頁	19	1	12	5	1	1883	848頁	15	0	0	3	12
1865	832頁	11	0	9	2	0	1884	870頁	133	28	4	22	79
1866	832頁	41	1	6	8	26	1885	864頁	154	10	5	23	116
1867	832頁	18	1	3	13	1	1886	856頁	189	19	1	37	131
1868	832頁	40	5	1	11	22	1887	968頁	5	0	0	1	4
1869	832頁	27	1	0	16	10	1888	1016頁	1	0	0	0	1
1870	872頁	43	1	1	19	22	1889	1048頁	0	0	0	0	0
1871	1240頁	101	7	4	41	48	1890	1016頁	0	0	0	0	0
1872	1040頁	158	32	6	55	65	1891	1056頁	0	0	0	0	0
1873	1176頁	44	7	5	12	20	1892	1272頁	0	0	0	0	0
1874	1084頁	94	27	6	22	38	1893	1264頁	0	0	0	0	0
1875	1056頁	131	27	7	39	58	1894	1252頁	0	0	0	0	0
1876	1068頁	153	34	14	45	61	1895	1254頁	15	---	---	---	---
1877	1040頁	96	26	7	26	35	1896	1288頁	9	---	---	---	---

諷刺画総数2188枚

<年別諷刺画リスト(1)1859-1870>

<1859>

- 1) 4/2 Street Scene in London---Winter Evening Photostat. <O>, p.212

<1862>

- 1) 8/30 John Morgan's highwaymen sacking a peaceful village in the West. <O>, p.548
- 2) 9/6 The Battle of Baton Rouge-sketches from the Camp of the Indiana Regiment. <O>, p.564
- 3) 9/20 A gallant color bearer. <F>, p.593
- 4) 9/27 The Rebel Army Crossing the Fords of the Potomac for the Invasion of Maryland. <O>, p.613
- 5) 9/27 A Rebel Guerrilla Raid in a Western Town. <D>, pp.616-617
- 6) 10/4 General McClellan Entering the Town of Frederick Maryland -The Popular Welcome. <F>.
- 7) 10/25 After the Battle -The Rebels in Possession of the Field. <D>, pp.680-681
- 8) 11/15 The Army of the Potomac "Little Mac" Making his Rounds. <O>, p.725
- 9) 11/15 The War for the Union-Surprise of Rebel Guerillas by a Squadron of United States Cavalry. <D>, pp.728-729
- 10) 12/27 A Battle as Seen by the Reserve. <D>, pp.824-825

<1863>

- 1) 1/3 Santa Claus in Camp. <F>, p.1
- 2) 1/3 Christmas Eve. <D>, pp.8-9
- 3) 1/17 The War in the West. <D>, pp.40-41
- 4) 1/24 The Emancipation of the Negroes, January, 1863--The Past and the Future. <D>, pp.56-57
- 5) 1/24 A New Plan to Frighten Fine Old English Gentlemen. <C>, p.64
- 6) 2/7 Historic Examples of Southern Chivalry, Illustrated by Thomas Nast--Dedicated to Jefferson Davis. <D>, pp.88-89
- 7) 3/7 A Scene in One of the Battles Before Vicksburg. <D>, pp.152-153

- 8) 3/14 A Negro Regiment in Action. <D>, pp.168-169
- 9) 4/4 A Night Scout in the Southwest -Surprise of an Outpost, and Survey of the Rebel Guns. <O>, p.217
- 10) 4/4 Arrival of a Federal Column at a Planter's House in Dixie. <O>, p.220
- 11) 4/25 A Group of Butternut Prisoners Taken From Life. <O>, p.261
- 12) 5/ 9 Contrabands Coming into Our Lines Under the Proclamation. <O>, p.293
- 13) 5/ 23 Capture of the Heights of Fredericksburg By the Sixth Maine Regiment, of Sedgwick's Corps. (First drawing for "Saving the flag.") <O>, p.324
- 14) 5/ 30 A Cavalry Attack. <D>, pp.344-345
- 15) 6/13 A Group of Union Prisoners Escorted Through a Rebel Town. <O>, p.373
- 16) 6/ 27 In the Trenches Before Vicksburg--from Sketches by Theodore R.Davis. <F>, pp.401
- 17) 7/11 Reveille in Camp---5 A.M. <O>, p.444
- 18) 7/ 18 The Result of War -Virginia in 1863. <D>, pp.456-457
- 19) 7/ 18 The Invasion of the North -Street Scenes in Philadelphia. <O>, p.460
- 20) 7/ 25 The Rebels Shelling the New York Militia in the Main Street of Carlisle, Pennsylvania. <O>, p.477
- 21) 8/22 The Army of the Potomac-Drawing Rations. <O>, p.540
- 22) 9/19 Southern Exiles on their way north. <D>, pp.600-601
- 23) 10/10 Grand Review of the Army of the Potomac. <D>, pp.648-649
- 24) 10/24 The Life of a Spy in Nine Tableaux. <O>, p.676
- 25) 10/24 Honor the Brave. <D>, pp.680-681
- 26) 11/21 Trapping Rebel Guerillas in the West. <O>, p.740
- 27) 12/5 Thanksgiving Day, November 26, 1863. <D>, pp.776-77
- 28) 12/5 The Prisons at Richmond -Union Troops Prisoners at Belle

Isle.<O>, p.781

- 29) 12/19 The Drummer Boy of Our Regiment-Eight War Scenes. <O>, p.805
- 30) 12/25 Christmas, 1863-Christmas Furlough. <D>, pp.824-825
- 31) 12/25 The Capture of Lookout Mountain -General Hooker Fighting Among the Clouds." <O>, pp.829

<1864>

- 1) 1/2 New Years Day, North & South. <D>, pp.8-9
- 2) 1/2 Angel of Peace. <C>, pp.16
- 3) 1/30 Central Park in Winter. <D>, pp.72-73
- 4) 2/6 Thanks to Grant. <F>, p.81
- 5) 4/2 General Sherman's Rear Guard. <O>, p.212
- 6) 4/2 The First of April, 1864. <D>, pp.216-217
- 7) 4/9 Our Heroines. <O>, p.229
- 8) 4/30 The Press on the Field. <D>, pp.280-281
- 9) 6/18 The Campaign in Virginia "On to Richmond." <D>, pp.392-393
- 10) 7/16 Our Flag -Fourth of July, 1864. <D>, pp.456-457
- 11) 8/27 Central Park in Summer. <D>, pp.552-553
- 12) 9/3 Compromise with the South---Dedicated to the Chicago Convention. <O>, p.572
- 13) 9/24 The Blessings of Victory---Victory will Bring Us Peace. <D>, pp.616-17
- 14) 10/1 The Halt. <O>, p.628
- 15) 10/15 The Chicago Platform. <D>, pp.664-665
- 16) 11/12 How the Copperheads Obtain their Votes. <O>, p.725
- 17) 11/12 Election Day, November 8th. <D>, pp.728-29
- 18) 12/3 Thanksgiving Day. November 24, 1864. <D>, pp.776-77
- 19) 12/31 The Union Christmas Dinner. <D>, pp.840-841

<1865>

- 1) 4/29 The Eve of War ---the Dawn of Peace. Sumter 1861-1865. <O>,

p.261

- 2) 4/29 Columbia mourns Lincoln. <D>, pp.264-265
- 3) 5/20 Palm Sunday -The Saviour's Entry into Jerusalem-The Surrender of General Lee and His Army to Liut. General Grant. <D>, pp.312-313
- 4) 6/10 Our Martyred President -Victory and Death-Abraham Lincoln. <D>, pp.360-61
- 5) 6/24 Our Arms Victorious. <D>, pp.392-93
- 6) 7/8 Peace ---Fourth of July, 1865. <D>, pp.424-425
- 7) 8/5 Pardon.--- Columbia. - "Shall I trust these men, " Franchise--- "And Not This Man?" <D>, pp.488-489
- 8) 8/26 Our Watering Places ---Views at Long Branch. <D>, pp.536-537
- 9) 11/11 1864. -Democracy - November, 1865. <O>, p.713
- 10) 12/9 National Thanksgiving. <D>, pp.776-777
- 11) 12/30 Merry Christmas to all. <D>, pp.824-825

<1866>

- 1) 1/6 Why not? <C>, p.16
- 2) 1/20 5 illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, pp.36-38
- 3) 1/27 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.53
- 4) 2/3 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.69
- 5) 2/10 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.85
- 6) 2/17 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.101
- 7) 2/17 Grand Reception given by the Seventh Regiment, January 31, 1886, at the Academy of Music, New York. <O>, p.108
- 8) 2/24 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.117
- 9) 2/24 President Lincoln entering Richmond, April. 4, 1865. <D>.
- 10) 3/3 3 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.133
- 11) 3/10 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>.

pp.149-150

- 12) 3/17 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.165
- 13) 3/24 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.181
- 14) 3/31 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.197
- 15) 4/7 3 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.213
- 16) 4/14 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.229
- 17) 4/14 Grand Masquerade Ball given by Max 3/etzek at the Academy of Music, April. 5, 1866. <D>, pp.232-233
- 18) 4/21 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.245
- 19) 4/28 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.261
- 20) 5/5 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.277
- 21) 5/12 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.293
- 22) 5/19 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.309
- 23) 5/26 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.325
- 24) 6/2 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.341
- 25) 6/9 3 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.357
- 26) 6/16 Scott's Death Bed. <O>, p.373
- 27) 6/23 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.389
- 28) 6/30 "The Halt"-A Scene in the Georgia Campaign. <F>, p.401
- 29) 6/30 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.405
- 30) 6/30 The Contrast of Suffering. Andersonville & Fortress Monroe. Treason must be made odious. <O>, p.409
- 31) 7/7 2 Illustrations for Inside- A Chronicle of Secession. <C>, p.421
- 32) 7/7 Jefferson Davis--- Why He Cannot Sleep. <O>, p.428
- 33) 7/14 The Uprising of Italy. Viva Italy-Italia Una. <O>, p.436
- 34) 7/21 Sketches in the Katskill Mountains. <D>, pp.456-457
- 35) 9/1 Reconstruction and How It Works. <D>, pp.552-53
- 36) 9/8 Timely warning to Union Men. The New Orleans Convention or Massacre. Which is more illegal? <O>, p.569
- 37) 9/29 The Event Filling the Eyes of Thousands with Tears of Joy,

First Blood. Massachusetts and South Carolina Coming Arm in Arm into the Convention. Patriotic Sentiment. Unbroken Harmony. <O>, p.617

38) 10/27 "Andy's trip." "Who has suffered more for you and this Union than Andrew Johnson?" <D>, pp. 680-681

39) 11/3 "King Andy---Do you want Andrew Johnson President or King? You pays your taxes and you takes your choice." <O>, p.696

40) 11/10 The Candidate of the Blood-thirsty Radical Faction in the Fourth Congressional District.(Greely) The Conservative Candidate of the Peace Democracy in the Fifth Congressional District.(Morrissy) <C>, p.720

41) 12/29 Santa Claus and His Works. <D>, pp.824-825

<1867>

1) 1/12 Slavery is Dead(?) Civil Rights Bill. Emancipation Proclamation January 1, 1863. <O>, p.24

2) 2/9 The Pope Ordering Our Minister, McKing to Remove American Protestant Worship from Rome. <1/2>, p.84

3) 2/9 The Government of the City of New York. A Chance to Steal Without the Risk of the Penitentiary. <O>, p.88

4) 3/2 Prometheus Bound---Grant. <O>, p.137

5) 3/16 The Georgetown Election--- the Negroes at the Ballot-Box. <1/2>, p.172

6) 3/23 Southern Justice. <D>, pp.184-185

7) 3/30 Amphitheatrum Johnsonianum---Massacre of the Innocents at New Orleans. July 30, 1866. <D>, pp.200-201

8) 4/6 St. Patrick's Day 1867. Brutal Attack on the Police. "The Day We Celebrate: Irish Riot" <O>, p.212

9) 4/13 Grand Masquerade of the Arion Society at the Academy of

Music, New York, March. 27, 1867. <D>, pp.232-233

- 10) 4/13 We accept the Situation. <1/2>, p.240
- 11) 4/20 Ignis Fatuus. <F>, p.241
- 12) 4/20 Why this Resolution Passed. Mr.Sumner (Rep., Mass.), from the Committee on Foreign Relations, reported the following joint resolution: " Resolved, That all persons in the Diplomatic Service of the United States are prohibited from wearing any Uniform or Official Costume not previously prescribed by Congress." <1/2>, p.253
- 13) 4/20 The Big Thing. Old Mother Seward salving Andy. <C>, p.256
- 14) 4/27 House Hunting. <O>, p.260
- 15) 4/27 Abraham Lincoln and the Drummer-Boy. <O>, p.264
- 16) 5/11 Portrait of Thomas Nast with Biographical Account --- [Photographed by Brady]. <O>, p.293
- 17) 5/25 "The Tyrannical Military Despotism of Our Republic" General Sickles and Con-federates. <O>, p.324
- 18) 6/15 Infanticide. Christ Suffer little children to come unto me. <O>, p.381

<1868>

- 1) 6/6 Chicago, May 21, 1868. Columbia decorating Grant. <F>, p.353
- 2) 6/27 The Political Niagara-"A Drawing Man Catches at a Straw." <F>, p.401
- 3) 6/ 27 Moses in the Bulrushes, and Chase-in for a Party. <C>, p.407
- 4) 7/ 4 A Recruiting Sergeant. "The Pope has sent a Recruiting Officer to the United States to enlist Troops for the Papal Guard. Garibaldi has Protested."-Ocean Telegram. <C>, p.427
- 5) 7/ 4 A Wild Goose Chase-Political Position of Chief-Justice Chase. <C>, p.432
- 6) 7/ 11 The Carpet-Baggers. Chicago, May 20. <C>, p.439

- 7) 7/11 The Bundlers. New York, July 4. <C>, p.439
- 8) 7/11 Sickly Democrat. Oh! must I swallow him whole Doctor Chase? <C>, p.439
- 9) 7/11 "Would you marry your daughter to a Nigger?" Rev. Dr. Chase (to the Bride). "Do you promise to love, honor, and obey-?" <O>, p.444
- 10) 7/18 The Youngest Introducing the Oldest. America and China. <O>, p.460
- 11) 7/25 The Democratic Convention, New York, July 9th, 1868. Alarm! Enter King****, ---" A Horse! A Horse! My kingdom for a Horse!" <C>, p.480
- 12) 8/1 The British Lion Disarmed. Alabama Claims clipping his claws. <O>, p.488
- 13) 8/8 "One Vote Less." ---Richmond Whig. Dead Negro. <C>, p.512
- 14) 8/15 Reconstruction. Columbia and Equal Rights. <F>, p.513
- 15) 8/15 The Lost Cause Ex-C.S.A. Democrat to Northern Democrat. "Do you think your light will last until I find it?" <C>, 528
- 16) 8/22 Prejudice. Negro Boy, "What! won't these stupid White Geese even let me go to school without hissing and biting at me?" <1/2>, p.540
- 17) 8/22 We'll fight it out on this Line if it takes all Summer." N.B.---The Only Safe and Direct Line to Washington. <1/4>, p.544
- 18) 9/5 "This is a White Man's Government." "We regard the Reconstruction Acts(so called) of Congress as usurpations, and unconstitutional, revolutionary, and void." -*Democratic Platform*. <O>, p.568
- 19) 9/19 Lead us not into Temptation. <O>, p.600
- 20) 9/19 "Keep the Ball Rolling," -Campaign Song. Grant and Colfax playing nine-pins. <O>, p.605

- 21) 9/26 The Odor of the Nigger (Republican) is Offensive; "But- All the Difference in the World." <1/2>, p.616
- 22) 10/3 The Modern Samson. <O>, p.632
- 23) 10/3 Seymour says the Nomination "had plunged him into a Sea of Troubles." <C>, p.640
- 24) 10/10 Patience on a Monument. <O>, p.648
- 25) 10/10 A Respectable Screen Covers a Multitude of Thieves. <C>, p.656
- 26) 10/17 Tidal Waves. Mrs. Partington (Seymour) tries to sweep back the Ocean. <C>, p.672
- 27) 10/24 Dignity and Impudence. in Grant's and Blair's letters of acceptance. <C> in <F>, p.673
- 28) 10/24 Why "the Nigger is Unfit to Vote." <C> in <F>, p.673
- 29) 10/24 Both Sides of the Question. The Boys in Blue. The Boys in Gray. <D>, pp.680-681
- 30) 10/31 All Quiet on the Potomac. <C>, p.695
- 31) 10/31 A white boy in Blue. <C>, p.695
- 32) 10/31 Appreciation of Art in North Carolina. <C>, p.695
- 33) 10/31 Grant Matchede Seymour. "Let us have peace." "A Mob can revolutionize as well as a Government." <1/2>, p.700
- 34) 10/31 The Democratic Hill-Broth. <C>, p.704
- 35) 11/7 Wilkes Booth the Second. <F>, p.705
- 36) 11/21 Unconditional Surrender Grant. <O>, p.745
- 37) 11/21 The Reign of Fraud and the Reign of Terror. <C>, p.747
- 38) 11/21 Democratic Majority. <C>, p.747
- 39) 11/21 Butler's himself again! 3 <C>s, p.747
- 40) 11/21 Ulysses the Giant Killer. Columbia. "Throw them on the same Heap." <C>, p.752
- <1869>
- 1) 1/9 Columbia to the New Year "Peace on Earth and Good will

- towards Men." <F>, p.17
- 2) 3/13 The Political Death of the Bogus Caesar (Andy Johnson). <O>, p.164
 - 3) 3/13 "Farewell, a long farewell, to all my Greatness!" <C>, p.176
 - 4) 4/24 The Navy Distinction Bill. <C>, p.272
 - 5) 5/15 Testimonial Vase Presented to Mr. Thomas Nast by the Union League Club of New York City, April 29, 1869. <C>, p.314
 - 6) 6/12 The Necessity of the Period-"to Make Both Ends Meet." <1/2>, p.381
 - 7) 6/ 9 Minister Motley as the Angel of Peace. John Bull. "Glad to see you in that rig, but what a whopping Big Bill!" <C>, p.400
 - 8) 6/26 Sir John Bull Falstaff reply to "London Punch." <O>, p.413
 - 9) 7/3 Six days with the Devil and One with God. Business man to Christianity. "I am too busy to see you now. Wait till Sunday." <1/2>, p.429
 - 10) 7/10 "All Hail and Farewell to the Pacific Railroad." Wendell Phillips. <O>, p.436
 - 11) 7/17 A Duel· After the spat. <O>, p.460
 - 12) 8/7 A Scene at Saratoga during the Visit of the Seventh Regiment. <1/2>, p.500
 - 13) 8/7 Pacific Chivalry. Encouragement to Chinese Emigration. <1/2>, p.512
 - 14) 9/11 The Democratic Scape-Goat. 8/. Belmont. <1/2>, p.592
 - 15) 9/18 One Good Row Deserves Another. Harvard to British Lion---"Can we have the Pleasure, etc?" <1/2>, p.608
 - 16) 10/2 College Reform. Past and Present. <O>, p.636
 - 17) 10/2 "Woman's Kingdom is at Home." <C>, p.640
 - 18) 10/9 The Ecumenical Council Pope. "I am infallible." <C>, p.656p.
 - 19) 10/16 Wall Street Closed for Repairs. "What a Fall was There, My Countrymen!" <C>, p.672

- 20) 10/30 The Flower of the Flock leaving the Fold. Pere Hyacinthe. <C>, p.704
- 21) 11/6 "We fights mit Sigel." <C>, p.720
- 22) 11/13 "The Empire is Peace." L.Napoleon Paris. <C>, p.736
- 23) 11/20 Uncle Sam's Thanksgiving Dinner. Free and Equal---Come one, come all. <O>, p.745
- 24) 11/27 Pilgrims progress in the 19th Century. "I am infallible." <O>, p.760
- 25) 12/4 Robinson Crusoe. (Pres. Grant). The Foot Print of the Land of Peace. <O>, p.777
- 26) 12/25 Ecumenical Council. Excommunication of Modern Civilization. Galileo of the 19th Century. "But nevertheless it does move." <O>, p.824
- 27) 12/25 Economical Council, Albany, New York. "The Good Counsel L can command in my sphere---Pius Hoffman I. <O>, p.825

<1870>

- 1) 1/1 "Oh! !! The Pope Pius 9th dropping into the 19th Century." <C>, p.16
- 2) 1/8 The Franking Privilege--- Abolished. <C>, p.32
- 3) 1/15 A Live Jackass Kicking a Dead Lion. <C>, p.48
- 4) 1/22 Tammany Circle. Shadows of Forthcoming Events. <D>, pp.56-57
- 5) 2/12 Robinson Crusoe Making a Man of His Friday. <C>, p.112
- 6) 2/19 Church and State. Europe and United States. <O>, p.121
- 7) 2/26 Sectarian Bitterness. Common School-"Union is Strength." <O>, p.140
- 8) 2/26 The Holy Sea. "Troubled Waters." <C>, p.144
- 9) 3/19 "Fort Sumter"---Our Public Schools Must and Shall be Preserved. The Man that Hauls Down Our Public Schools

- Shoot Him on the Spot. <O>, p.185
- 10) 4/9 Time Works Wonders. Jeff Davis & Senator Revels. <O>, p.232
- 11) 4/16 The Greek Slave. <O>, p.248
- 12) 4/16 Senator Tweed in a New Role. <O>, p.249
- 13) 4/16 Foreshadowing of Coming Events in Our Public Schools. <C>, p.256
- 14) 5/7 Roman Catholics Disgracing Themselves. <C>, p.304p.
- 15) 5/14 A Dangerous Game. An Old Fable with a Modern Application. <C>, p.320
- 16) 5/28 The Court of Death. King Death's Distribution of Prizes. Bacchus takes the First Premium. <O>, p.344
- 17) 6/4 Excelsior in Fraudulent Voting, New York. <O>, p.356
- 18) 6/18 Charity Covers a Multitude of Sins. <C>, p.400
- 19) 7/2 The Cuban Sparring Match at Washington. <C>, p.432
- 20) 7/16 The Martyrdom of St. Crispin, cheap labor. <C>, p.464
- 21) 7/23 Throwing down the Ladder by Which They Rose. <C>, p.480
- 22) 7/30 "I am now infallible." <C>, p.496
- 23) 8/6 The New Comet---cheap labor. <O>, p.505
- 24) 8/6 The Latest Edition of 'Shoo, Fly!' <C>, p.512
- 25) 8/20 "Robbing the Cradle and the Grave." The Best of Friends Must Part.-"au revoir." <1/2>, p.540
- 26) 8/20 War with Prussia --- The French Phoenix. <C>, p.544
- 27) 8/27 Who goes there? Death and Louis Napoleon. <O>, p.552
- 28) 9/3 The French Eagle and the Arrow. <C>, p.573
- 29) 9/10 Napoleon. "Dead Men's Clothes Soon Wear out" <O>, p.588
- 30) 9/10 "The Seat of War." The French Throne. <C>, p.592
- 31) 10/1 "The Promised Land," as seen from the Dome of St. Peter's, Rome. <F>, p.625
- 32) 10/8 Europe and America Overlooking the Valley of Death. <O>,

p.645

- 33) 10/8 Pope Pius Ninth. <O>, p.668
- 34) 10/29 The Shadow Ominous to Tyrants. Italy 1860, France 1870.
<C>, p.695
- 35) 10/29 The Power behind the Throne. <O>, p.697
- 36) 10/29 The Boot on the Right Leg. <C>, p.704
- 37) 11/5 Our modern Falstaff Reviewing His Army. <O>, p.713
- 38) 11/12 It's love that makes the World Turn Round. <C>, p.727
- 39) 11/12 Military Glory. <O>, p.728
- 40) 11/26 Die Wacht am Rhein. <O>, p.761
- 41) 12/10 Victor Emanuel in Rome. <C>, p.800
- 42) 12/17 Butler-Fe, Fo, Fi, Fum! I smell the blood of an Englishman.
<C>, p.824
- 43) 12/31 Christmas. <O>, p.865

Notes

- (1) Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (London, revised edition, 1991) (邦訳『増補—想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』白石さや、白石隆訳、NTT出版、1997)
- (2) Eric Hobsbawm, "Mass-Producing Tradition: Europe 1914," Eric Hobsbawm & Terence Ranger, eds. *The Invention of Tradition* (Cambridge, 1983) (E.ホブスボウム、T.レンジャー編『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭ほか訳、紀伊国屋書店、1992)
- (3) John Bodnar, *Remaking America: Public Memory, Commemoration, and Patriotism in the Twentieth Century* (Princeton, 1992) (ボドナー『鎮魂と祝祭のアメリカ—歴史の記憶と愛国主義—』青木書店、1997) ; John Bodnar, ed., *Bonds of Affection: Americans Define Their Patriotism* (Princeton, 1996)
- (4) Stephen Skowronek, *Building a New American State: The Expansion of National Administrative Capacities, 1877-1920* (New York, 1982), p.3.
- (5) 長田豊臣『南北戦争と国家』(東京大学出版会、1992年)がその先鞭を付けたもの

- の、未だ再建期研究は南部史中心に従来の「一匹のラバと40エーカーの土地」的な分析視角に縛られているのが現状である。
- (6) S. Guenter, *The American Flag, 1777-1924: Cultural Shifts from Creation to Codification* (グインター『星条旗-1777・1924』和田光弘ほか訳、名古屋大学出版会、1997)；Philip F. Detweiler, "The Changing Reputation of the Decaration of Independence: The First Fifty Years," *William and Mary Quarterly* 19, 1962; Len Travers, *Celebrating the Fourth: Independence Day and the Rites of Nationalism in the Early Republic* (Amherst, 1997); David Glassberg, *American Historical Pageantry: The Uses of Tradition in the Early Twentieth Century* (Chapel Hill, 1990); John R. Gillis, ed., *Commemorations: The Politics of National Identity* (Princeton, 1994); Lyn Spillman, *Nation and Commemoration: Creating National Identities in the United States and Australia* (Cambridge, 1997)など。日本人の研究としては、松本悠子「アメリカ人であること・アメリカ人にすること-20世紀初頭の「アメリカ化」運動におけるジェンダー・階級・人種-」『思想』1998年2月；和田光弘「アメリカにおけるナショナル・アイデンティティの形成-植民地時代から1830年代まで-」『岩波講座:世界歴史17-環太平洋革命』岩波書店、1997；阿部安成ほか編『記憶のかたち-コモモレーションの文化史』柏書房、1999；川島浩平「国民国家の形成と国立公文書館-アメリカ合衆国の場合-」歴史人類学会編『国民国家とアーカイブズ』日本図書センター、1999。
- (7) キャロル・グラック「思想の言葉」『思想』845号、1994年11月；小路田泰直「日本史の誕生-『大日本編年史』の編纂について-」128頁、西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房、1999。
- (8) 「アングロ・コンフォーミティ」「埋埒理論」「文化多元主義」のいずれの同化モデルも、米国の最優先の政治課題である「多様性の統一(E Pluribus Unum)」を実現するためのビジョンであり、そこでは国家はアプリアリな前提とされており、国家を相対化する視点はない。
- (9) 同様の指摘は、中條献「公的記憶」、「伝統」、「歴史」-現代アメリカ合衆国社会と「ナショナル・イメージ」-」『アメリカ史研究』21号、1998；岩崎稔「忘却のための「国民の物語」」小森陽一・高橋哲哉編『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会、1998。
- (10) 日本の歴史修正主義者である自由主義史観の議論は、アメリカ社会の病巣を告発する点できわめて反米的であるが、彼等には実はアメリカ的なナショナリズムや盲

目的愛国主義をモデルとしているように見える。アメリカ史研究者がこのような立論に対して沈黙することはもはや許されない。

- (11) 牧原憲夫『客分と国民のあいだ—近代民衆の政治意識—』吉川弘文館、1998。
- (12) ミシェル・フーコー、田村俣訳『監獄の誕生—監視と処罰—』新潮社版、pp.104-105,196国民国家への包摂が負の資源をもたらす例として、戦時期のアメリカ女性の国民化を扱ったものとして以下の論考がある。上野千鶴子「英霊になる権利を女にも?—ジェンダー平等の罨—」『同志社アメリカ研究』35号、1999年3月。
- (13) G.L.モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ—市民道徳とナチズム—』柏書房、1996年。
- (14) 1994年・1995年のスミソニアン航空宇宙博物館での「エノラ・ゲイ号」の展示が在郷軍人会の圧力で大幅な修正を余儀なくされたのは記憶に新しい。能登路雅子「歴史展示をめぐる多文化ポリティクス」油井大三郎・遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ—揺らぐナショナル・アイデンティティー—』東京大学出版会、1999年、189頁。
- (15) 川島浩平、前掲論文、169頁。パブリック・メモリーに関する研究の側でも、memory / history, internal / external (Nora); incorporated / inscribed (Connerton[1989]); living / dead (Lowenthal [1985]); vernacular / official (Bodnar[1992]) のような二項区分が見受けられる。前者には「本物の、真正正銘の、ありのままの」、後者には「上から押しつけられた、捏造された」といった含意があるとされるが、この区分もまた無意味であろう。Pierre Nora, “Between Memory and History: Les lieux du memoire,” *Representations*, no.26 (Spring, 1989) pp.7-25; Paul Connerton, *How Societies Remember* (Cambridge, 1989); David Lowenthal, *The Past is a Foreign Country*(Cambridge, 1985)。
- (16) 「過去」研究としては、Michael Kammen, *Mystic Chords of Memory: The Transformation of Tradition in American Culture* (New York, 1991); Roy Rosenzweig & David Thelen, *The Presence of the Past: Popular Uses of History in American Life* (New York, 1998) ト라우マに関する研究としては、Arthur G. Neal, *National Trauma and Collective Memory: Major Events in the American Century* (New York, 1998)。
- (17) Eric Foner ed., *The New American History* (Revised and Expanded Edition)(Philadelphia, 1997) pp.96-103 日本の再建期研究については、長田豊臣「歴史2:19世紀」阿部斉、五十嵐武土編『アメリカ研究案内』東京大学出版会、

1999年、37-44頁を参照。

- (18) 1915年に封切られたディヴィッド・グリフィス監督の『国民の創生』は、KKKを英雄視した人種の偏見を助長する作品として今日上映されることは稀である。だが、この作品は南北戦争の記憶のかたちを考察する際、極めて重要である。本作品が上映される二年前の1913年、アメリカではゲティスバークの戦い50周年の記念式典の準備が国民の関心を集め、実に98本の南北戦争関連のフィルムが作られたと言われる。黒人奴隷解放の社会革命を目指した南北戦争のイメージは、一転してこの映画で南部白人と北部白人の「兄弟喧嘩」への読み替えられた。同年行われた奴隷解放宣言とゲティスバークの戦い50周年の記念式典においてウィルソン大統領は、奴隷解放宣言には一切言及せず、「国民を形成するための」戦場での「大勢の無名兵士の血と犠牲」を悼んだ。おそらくこの時期に、南北戦争の記憶のなかの人種平等の記憶の集団的忘却が進行し、南部と北部の文化的和解が完成したと推測される。ナショナリズムがこのような人種主義を内在させていたとすれば、世紀転換期以後のアメリカの対外的な「帝国意識」との関連性を問うことも可能になろう。
- (19) David Roediger, *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class* (New York, 1991); Matthew Jacobson, *Whiteness of a Different Color: European Immigrants and the Alchemy of Race* (Cambridge, 1998); Theodore Allen, *The Invention of the White Race* (New York, 1994); Noel Ignatiev, *How the Irish Became White* (New York, 1995). また、この時期に「アメリカ国民」の境界に位置していたアジア系移民、とりわけ中国人移民の研究としては、貴堂嘉之「「帰化不能外人」の創造—1882年排華移民法制定過程—」『アメリカ研究』29号、1995を参考。
- (20) 再建期の表象研究としては、公共空間の彫刻モニュメントの分析を通じて、自由や解放の社会的意味を検証した Kirk Savage, *Standing Soldiers, Kneeling Slaves: Race, War, and Monument in Nineteenth-Century America* (Princeton, 1997)の研究が、極めて示唆に富む。内戦による50万人以上の兵士の死によって暴力的に廃止された奴隷制の記憶が、公共空間においてどのように語られていたのかを検証している。戦後の新しい人種観を示すべき公共の表象空間において、彫像が「跪く黒人奴隷」という古いステレオタイプを特徴としていた点や、〈解放〉のモニュメントにおいて、リンカーン大統領と解放黒人を一組とした彫刻が、新しい自由や近代的な解放ではなく、マニユミッションによる解放をイメージしたパターナルな支配・従属の関係に読み替えられてイメージが立ち現れてくる過

程を見事に描き出している。リンカーン像に関するMerrill D. Peterson, *Lincoln in American Memory* (New York, 1994)も個別研究として重要。

- (21) ナストの風刺画を使った個別研究としては、貴堂嘉之「中国人移民のイメージの相克—トマス・ナストの風刺画の世界—」(『移民研究年報』第3号、1997)がある。また、当時の風刺画を扱った研究としては、菊川雅子「都市と近代のイメージ—ウインスロー・ホーマーの捉えたポストン—」(『同志社アメリカ研究』34号、1998)がある。
- (22) トマス・ナスト研究としては、Morton Keller, *The Art and Politics of Thomas Nast* (New York, 1968); Albert Paine, *Thomas Nast: His Period and His Pictures* (New York, 1904); J. Chal Vinson, *Thomas Nast: Political Cartoonist* (Athens, 1967); Puran Singh Khalsa, *Thomas Nast and "Harper's Weekly": 1862-1886* (Ph.D. Dissertation, 1984); アメリカの政治諷刺漫画研究としては、Roger Fischer, *Them Damned Pictures: Explorations in American Political Cartoon Art* (North Haven, 1996); Thomas Leonard, *The Power of the Press: The Birth of American Political Reporting* (New York, 1986); Charles Press, *The Political Cartoon* (Rutherford, 1981); Stephen Hess & Milton Kaplan, *The Ungentlemanly Art: A History of American Political Cartoons* (New York, 1968)